

附属中 読む

[学習案]

詩の解釈における読みの交流

上越教育大学 松本 修

1 題材名 報告 (宮澤賢治)

2 学級 上越教育大学学校教育学部附属中学校 1 学年 3 組

3 題材観

1) 「報告」のテキスト

報告

宮澤賢治

さつき火事だとさわぎましたのは虹でございました

もう一時間もつづいてりんと張つて居ります

2) 「報告」の題材観

『春と修羅』(大正 13 年)に発表された短詩である。この詩については、大きく分けて二種類の解釈が行われている。第一は、「人々ないし作者が、「火事だ」と騒いだ。それは虹であったと改めて誰かに報告している」というものである(斎藤文一)。第二は、「にわか雨を降らせて火事を消そうというかのようになさわいだのが虹で、その虹が火事を消したような顔をして、颯爽と張っている」というものである(篠原資明)。このような解釈の分岐が学習者の中にも起こる可能性があり、そうした解釈の相違を踏まえて読みの交流を起こすことができる題材であると思われる。大きな変容はないかもしれないが、そうした交流による読みの深まりを期待したい。

3) 読みの交流について

文学作品を教材とする学習においては、個々の学習者がテキストと対峙して解釈を作り上げることがまず大切であるが、個々の解釈を交流させることで相互評価・自己評価をひきおこし、自分の解釈を見直し、読みを深めていくことが大切であると考え。これは固定的な解釈への閉塞を避けると同時に、衝突のない多様性に委ねてしまう無意味な開放をも避けるものである。

こうした読みの交流を起こすためには、表現の構造と関連させて自らの解釈を説明するということが大切である。この詩においては、文末表現の特徴、主語の把握が重要になる。

4 学習目標

1) 詩の表現に基づいて、自らの解釈をつくる。

2) 互いの読みを交流させ、自らの解釈を深める。

5 単元の展開 (全1時間)・・・「7 本時の展開」参照

6 本時の目標 ・・・「4 学習目標」参照

7 本時の展開

学 習 内 容	学 習 活 動	指導上の留意点
1. 自らの解釈を作る	・ テキストに出会う	・ 本文プリント配布 作者名を除く
2. 読みの交流	・ 気付いたことを書く ・ 各自で朗読を工夫して発表する	・ ワークシート配布 ・ 工夫した点を気付いたことに関わって説明させる
3. 解釈を深める	・ 解釈の違いに気付く ・ 気付いた点を発表する ・ 解釈内容がよく分かるように言葉を補って解釈文を書く	・ 違う点を指摘する ・ 板書してまとめる
4. 読みの交流	・ 解釈文を発表する	・ 違う解釈に対する意見をメモさせる (相互評価)
5. 解釈を深める	・ 異なる解釈を持つもの同士で討論する ・ 典型的な解釈の例文を読む ・ 例文について意見を発表する ・ 自分の解釈文を直す	・ 典型的な解釈を整理しながらそれぞれの意見を聞いていく ・ 補助資料配付
	・ 直した解釈文を発表する	・ 直した理由もメモさせる (自己評価) ・ シートを提出させる